

長期項目から見える日本人の国民性

朴 堯星 データ科学研究系 准教授

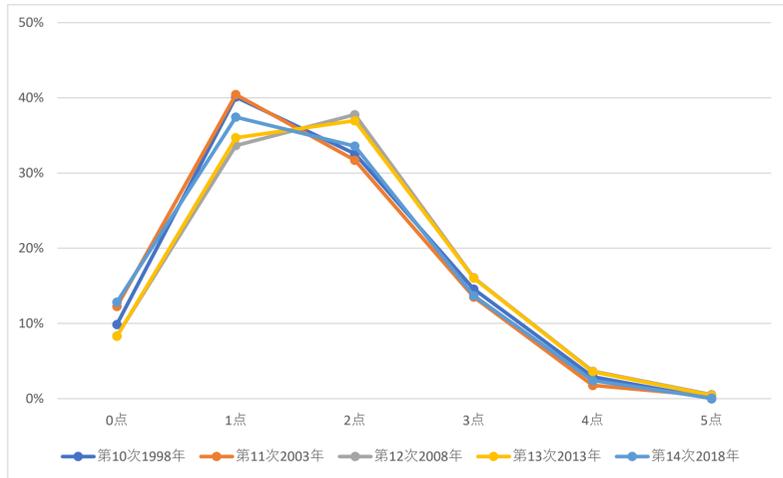
【はじめに】

平成期は、バブル崩壊をはじめ、リーマンショックなどの世界同時不況、さらに東日本大震災などから、社会のあらゆる場面で改革と変動に直面することになった時期でもある。そのことが、従来までの日本人の人間関係観や意識になんらかの変化をもたらす余地がある。そこで平成期を中心に、「日本人の国民性調査」の第9次(1998年)調査～第14次(2018年)調査のデータに基づき、同調査の長期継続項目である「義理人情スケール」と「くらし方」に焦点を当て、平成期における日本人の価値観や考え方を明らかにすることを目的とする。

【方法】 調査の概要

・第14次国民性調査は、日本全国に居住する20歳以上の日本人男女から層化多段無作為抽出により抽出された個人を対象、個別訪問面接法で遂行、2018年調査のK型調査票の回収標本サイズ(計画標本)は3209であり、回収数1584、回収率49.4%である。

【結果】

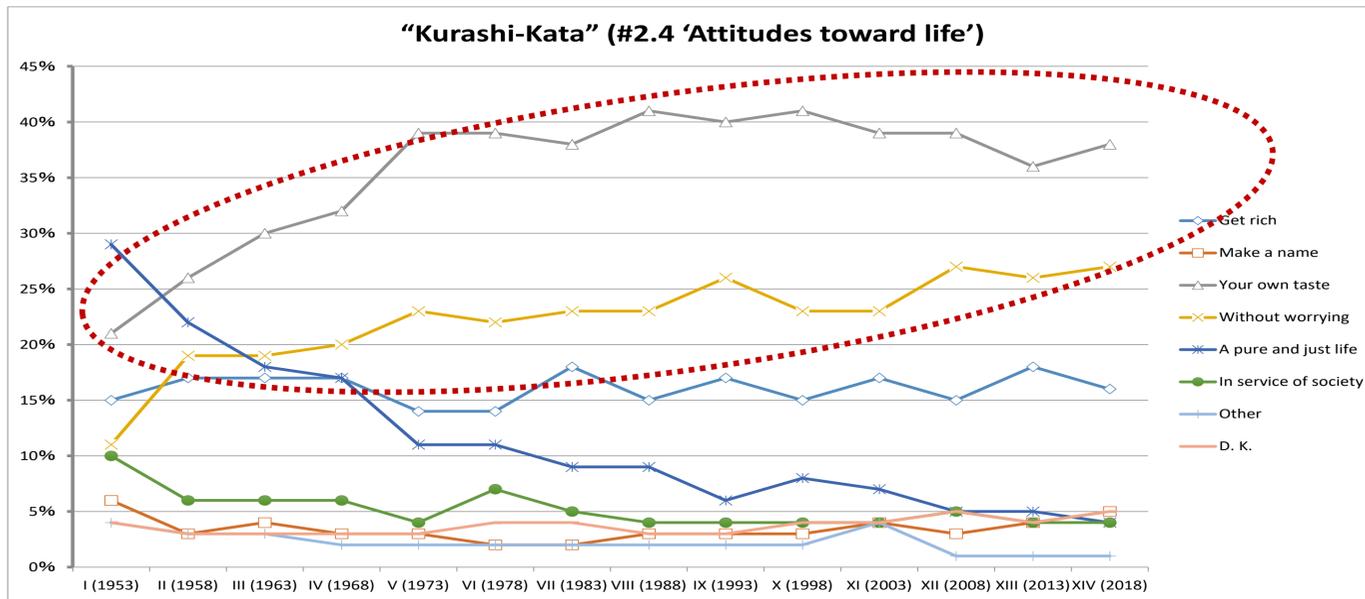


		0point	1point	2point	3point	4point	5point	total	0point(%)	3point+(%)
X (1998)	20-29	18%	42%	28%	10%	1%	0%	173	18%	11%
	30-39	11%	41%	37%	10%	2%	0%	207	11%	12%
	40-49	10%	42%	32%	13%	3%	0%	265	10%	16%
	50-59	9%	42%	33%	13%	3%	0%	267	9%	16%
	60-69	6%	38%	30%	20%	5%	0%	255	6%	26%
70+	7%	36%	34%	20%	2%	0%	172	7%	23%	
XI (2003)	20-29	17%	42%	31%	9%	0%	0%	121	17%	9%
	30-39	13%	40%	33%	13%	0%	0%	209	13%	13%
	40-49	14%	41%	30%	14%	2%	0%	195	14%	16%
	50-59	12%	45%	29%	12%	1%	1%	268	12%	14%
	60-69	12%	38%	34%	12%	3%	0%	253	12%	15%
70+	5%	35%	33%	22%	5%	0%	146	5%	27%	
XII (2008)	20-29	10%	38%	34%	15%	4%	0%	186	10%	18%
	30-39	10%	35%	37%	16%	2%	0%	290	10%	18%
	40-49	9%	31%	39%	16%	5%	0%	283	9%	20%
	50-59	9%	33%	40%	13%	4%	1%	359	9%	18%
	60-69	6%	34%	36%	21%	3%	1%	381	6%	24%
70+	7%	32%	40%	15%	5%	1%	230	7%	21%	
XIII (2013)	20-29	11%	47%	29%	9%	4%	0%	150	11%	13%
	30-39	10%	36%	33%	18%	4%	0%	261	10%	22%
	40-49	12%	32%	38%	16%	2%	1%	250	12%	18%
	50-59	8%	34%	41%	12%	4%	1%	299	8%	17%
	60-69	8%	33%	37%	19%	3%	0%	316	8%	22%
70+	4%	33%	40%	19%	4%	0%	315	4%	24%	
XIV (2018)	20-29	20%	39%	29%	11%	1%	0%	131	20%	12%
	30-39	18%	36%	29%	14%	3%	0%	224	18%	17%
	40-49	13%	35%	32%	17%	3%	0%	288	13%	20%
	50-59	14%	39%	35%	11%	2%	0%	267	14%	13%
	60-69	9%	35%	41%	13%	2%	0%	310	9%	15%
70+	9%	40%	33%	15%	3%	0%	364	9%	18%	

大きな変動なし;「義理人情」は、決して時代遅れのものではなく、現代日本人においても根強く存在する日本人の人間関係を表すもの

第14次(2018年)調査でも、同じく40代の中年層において、義理人情スケール値がより高い。しかし、昭和期並び平成初期、そして60歳以上の高年齢層のスケール値の高さは、2018年調査には見られず、1998年調査に比べて11ポイント減少

「0点は若年層ほど多く高年齢層に少ない」という傾向はこの期間を通じてほぼ変わらないのに対し、3点以上の高い義理人情的な回答を好む回答者の年齢層間の差(高年齢層がより好むという傾向)は、平成初期には明瞭であったものが、次第に平準化する方向に変化したように見える。
⇒ これまで、年齢層間の差が「伝統対近代」の価値観の対照的な軸を為すという尺度の機能が、次第に失われた可能性がある」と解釈される。



・“一生けんめい働き、金持ちになること”，については、15%前後の数値で相対的に安定。こうした暮らし方の目標を掲げる人は時代を問わず一定数(約1/6)いることを示している

・“まじめに勉強して、名をあげること”，“自分の一身のことを考えずに、社会のためにすべてを捧げてくらすこと”は、元々割合の数値が小さく、目立った変化はない。

・“金や名誉を考えずに、自分の趣味にあったくらし方をする”や“その日その日を、のんきにクヨクヨしないでくらすこと”の増加。
⇒ 特に、1958年以降は特に、平成期において“趣味にあったくらし”を挙げる人が最も多い

・背景の一つには、平成初期、多くの日本人が感じていた経済成長の自負はもはや、平成の中期から末期にかけて、相対的な意味で日本の威信が停滞しつつあることを薄々感じるようになっていたということは否めないだろう。

⇒ 平成期を「失敗の時期」と論じている吉見(2019)の指摘とも共通。

・“その日その日を、のんきにクヨクヨしないでくらすこと”が安定していることから読み取れるように、決してへこんだりせず明るく前向きに平穩に暮らすことこそが目標の一つとして根差していることが浮かび上がっている。即ち、平成期ならではのさやかな人々の自負や誇りに近いものとして表れていることもうかがえる。

⇒ 素朴な幸せを大事にする現代日本人像に関する議論(例えば、古市(2011)、村田・政木(2013)、内閣府(2009)が実施した世界青少年価値観調査(1972年～2003年)とも矛盾せず。

【参考文献】

Yoosung Park and Tadahiko Maeda(In press). Looking Back on Japan in the Heisei era from the Perspective of Repeated Survey Data: Focusing on a Sense of “Giri-ninjō (Obligation-Human feeling)” and “Kurashi-Kata” (Attitudes towards Life) in the Surveys on the Japanese National Character, Behaviormetrika.

林知己夫・櫻庭雅文(2002)『数字が明かす日本人の潜在力』、講談社、東京。